

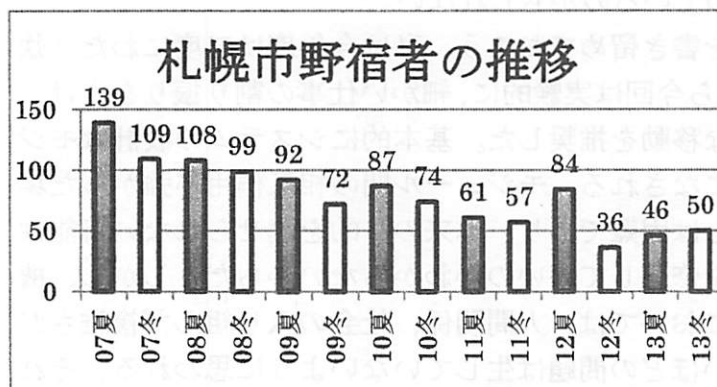
# ともに生きる

2014 年 1 月 31 日発行（第 29 号）

## ‘13 冬季人数調査報告

2014 年 1 月 18 日、路上生活者の実態把握のため、冬の人数調査を行いました。冬の調査では札幌市の業務委託を受ける形で交通費および会議室等を提供していただき、数名の市役所職員は実際の調査にも参加しました。

冬の調査には労働と福祉を考える会の会員を中心に計 24 名が参加して下さいました。冬の人数調査は午前 3：30～6：30 でのかなり厳しい寒さに耐えながらのものであるにも関わらず、ボランティアで参加してくださる若い世代が多かった印象です。調査方法としてはいつも通り 2～4 人が 1 組となり、札幌市内全域をタクシー或いは徒歩で調査して廻るという形で行いました。



札幌駅周辺	23 名（男 9 女 0 不明 14）
大通公園周辺	3 名（男 3）
中島公園・白石区	1 名（不明 1）
狸小路・すすきの	15 名（男 15）
札幌郊外（5 コース）	7 名（男 6 女 1）
豊平川河川敷	1 名（男 1）
計	50 名（男 34 女 1 不明 15）

郊外よりも市街地での目撃が多いようです。狸小路の雑貨店やファストフード店、札幌駅近くではバスターミナルに集中して人が多くみられました。年々その人数に減少傾向が有るなかで、今回の調査が前回より多くなったのは路上生活者の数の増加と言うよりも、むしろ数えることが比較的うまくいったからであろうと考えられます。

また、今回女性の数が極端に少ないのはバスターミナルでの野宿者が、こちらに背を向ける様にして眠っていたため不明という扱いになったからではないかと思います。そして風が吹いていたこともあり、多くの人が屋根のあるところで休んでいるという印象を受けました。（小山田伸明）

## 12月7日の炊き出し報告



写真を入れたいところだが、忙しくて撮影するのを忘れていた。司法書士会との共催で、何がそんなに忙しいものかと訝しむ向きもあるだろうが、ところがどっこい、だ。ちょうどそのころ、身元不明のホームレスらしき女性が交通事故で亡くなるという痛ましい事件が発生し、それと関連してTVカメラが入っていたのだ。カメラなど入れば当事者の不信感を買うのは容易に想像できるので、断ろうかとも思ったのだ

が、身元調査の役にたつならと思い、私の判断でいったん許可し事後的に司法書士会からの了承も得た。撮影前に当事者から了解を得るなどの仕事や撮影のポジションの指定など、序盤戦はてくてこまだったのである。中盤および終盤はそれほど忙しくなかったのだが、要は撮影を忘れていたのである。

今回は甘酒の配布とコンサートという二つの新たな試みが試みられようとした。しかし、会場が直前になって手のひらを返し、コンサートは中止となったので、実現したのは甘酒だけだった。甘酒は下郷事務局長主導で、麴ともち米を自宅の電気釜で発酵させて作った。しかし、道民は酒粕を煮詰めて砂糖を加えて作った甘酒になれているからか、当事者の方からは「薄い」等のコメントが数多く寄せられた。私個人としては、北海道生まれであるが、おいしく、非常に気に入っており、今度また作ってみたいと思っているほどだ。当事者の方々はやはり甘味の強いものを求めているのかもしれない。

炊き出し運営に関しても若干の考察を書き留めておこう。私は今年度は二度にわたり炊き出しの責任者を務めた。前回の経験から今回は実験的に、細かい仕事の割り振りをさけ、さらに自分の担当でない仕事への自由な移動を推奨した。基本的にシステムの設計はモジュール間の相互作用が小さくなるようになされる。モジュール間の相互作用が強かった場合、システムの振る舞いを予測することは困難であり、本来の目的を達せられない可能性があるばかりか、問題が生じてもどこを修正していいのかわからないからだ。しかし、機械や官僚機構は別としても、日常経験においては、人間関係、社会の入り組んだ複雑さがあるにもかかわらず、それにふさわしいほどの問題は生じていないように思われる。それは人という種が社会という環境に対して適応するために獲得してきた能力なのであろう。私は今回、その能力に任せてみたのである。些細な問題が生じたとしても、自由な行動を許された人間はそれらの問題を自主的に解決に導くであろうし、そのほうがより人間的なありかただろうと考えるからである。私たちは「ボランティア」でやっているわけだから、そこにおける活動からすら疎外される必要などないのだ。

とはいえ、次回も私が担当になったのだとしたら、また趣向を変えてみたいという思いがある。次は逆に相互作用の少ないかつちりした感じで、やってみたいなというように思う。

(小川遼)

日時：2013年12月7日(土) 18:00~20:00

場所：札幌市民ホール

共催：札幌司法書士会

参加スタッフ：34名

来場者：50名

## むむむ…ろうふくお料理会

労福のフォローアップ活動には、以前から疑問を感じていました。会員の誰かの気が向いたときにふらっと訪問する、というやり方もどうなのかな？と思いますし、それ以前に、今まで労福が関わった当事者で居宅生活を始めた方が何名いるのかさえはつきりわかっていないという現状も、はじめて聞いたときにはとても驚きました。

こうした状況をどうにかこうにかしてみたいと思い、昨春は当事者と会員の情報を集約するためのデータベースをせっせと作りました。個人情報の扱いが難しく、まだ実際の運用には至っていませんが、今年度中には準備を整えたいと思っています。

また夏には、住所のデータが残っている方に暑中見舞いを書き、その住所が今も使われているのか、特に生活に困っていたり孤独や不便を感じている方はいないかということ調べました。夜回り前後の時間を使って書いていたので、時間切れで一部の該当者には送ることができなかったのですが、それでも50枚ほど送ってみて、返事が返ってきたのは一通だけでした。

そして今回、孤立を防ぐ新たな試みとして、居宅生活者を対象とした交流会を行うことにしました。それが12月23日(月・祝)の「ろうふくお料理会」です。開催趣旨は、対話を通して居宅生活者の抱えている問題やニーズ（無ければ無いでもよい）を探ることと、居宅訪問以外の形でフォローアップ活動の実現可能性を考えるヒントとすることの二点です。開催に当たってまず始めたのは、該当者に今度は電話で連絡を取るということでした。しかし、手元にある2010年度以降の居宅生活者リストの中で、こちらが電話番号を把握している方はたったの10名とあまりに少なかったため、住所のわかっている他6名にもお誘いの葉書を送りました。

こうして迎えたろうふくお料理会当日、出席した居宅生活者は3名でした。当事者同士の交流も進むようにと会員の参加人数もあえて抑えて6名でしたので、まあまあアットホームな雰囲気になりそうだと最初は思ったのですが、会が始まる前の待ち時間こそ当事者同士の交流もあったものの、一旦調理が始まってしまうとそれぞれが作業に一生懸命で、あまり会話が弾んだとは言えませんでした。今考えてみると、参加した当事者とはほとんど交流のない会員も多かったため、緊張感が生まれるのも無理ないことだったのかもしれない。しかも、火加減を誤って片方のグループのシチューが焦げたのですが、その失敗が不安を煽ったのか、それをきっかけに当事者のうちの2人が知らないうちにいなくなり、最終的には当事者1人を囲む形の会食となってしまいました。途中で帰ってしまった2人には今連絡を取って、フォローを試みているところです。

そんなわけで、「とりあえずやってみよう」ということで始まったこの企画でしたが、当初にあった開催趣旨を考えると、その結果は決して芳しいとは言えないものでした。しかし、まったく収穫がなかったわけでもありません。まず、そもそも労福で連絡の取れる“フォローアップ可能な”居宅生活者がほとんどいない、ということがはっきりしました。今までの状態を考えれば、これがわかっただけでも労福にとっては大きな一歩のような気さえします。それからこれは個人的なことなのかもしれませんが、「あの人は特にこれ以上の支援は要らなそうだな」と思ったケースでも、脱路上後に接触を試みることの必要性を感じるようになりました。実は、電話で「今回は出席できない」という返事を頂いたうちの二人は、私も関わったことのある方たちでした。そして欠席の理由ですが、一方は、道外で決まった仕事を今も続けているから、もう一方は、非正規から準正規になって忙しいからとのことでした。「ずっと連絡しようと思っていました」「今度みんなに鍋でもおごらせてください」・・・最後に会った時と比べて随分明るくなった二人の声を聞きながら、どんなに至らない支援であっても、“あの頃”に接していた支援者に連絡を取って近況を報告するという行為は、私が想像していたよりも本人たちにとっては大変大きな意味があるのかもしれないと、ふと思ったのです。

労福がフォローアップ活動に関してこれからどんな方針で展開していくのが良いのかを考えると、なんだかもう鬱々としませんが、それでもまずは「一人一人、丁寧に」というところからであることは間違いないんだろうなと感じています。こんなことを私が言うのも変ですが、今ようやくスタート地点が見えてきたのかもしれない。（下郷沙季）





## 釜ヶ崎・越冬闘争の報告

大阪・釜ヶ崎は日雇い労働者が暮らす街。行政が閉ざされる  
年末年始には毎年、越冬闘争が繰り広げられてきました。  
今年の冬は、労福会から4人が参加。その報告をします。



### 「楽しかった釜ヶ崎」

東 美乃里

私の父親の実家が大阪にあり年越しのために大阪に行ったのですが、大晦日は釜ヶ崎に行くと  
言うと、親戚一同に「あんなん行くとこちゃうわ」「治安悪いで」「よう行かん」などと脅され、大阪府民に根付いている“近づいてはならない場所”という意識を感じました。まあおじさん達がそこら辺で寝ていて、昼間からお酒を飲んでいて、いかにも貧困の街です、なんて場所に行くのを勧める人はいないでしょうね。ですが「改札でたらおしっこ臭いねん」と教え込まれた新今宮駅まで行くと、そこにはブルーシートがズラーっ！と道路の両端にまるで運動会の場所取りのように並んでいました。そしてすれ違う人みな日焼たおじさん。そして住宅街の中に入っていくと炊き出しの会場である三角公園があり、その隣に私たちの事務所がありました。そこで出会った実行委員会の方が釜ヶ崎を案内してくれると言うので行ってみると、いたるところに自販機があり、しかもその価格が非常に安くほぼ50円！いいな～と思っていますと、案内をしてくれている方がお話を始めました。釜ヶ崎は大阪万博やバブル時代の都市の成長期に日雇い労働者として尽力した人たちの街であったが、オイルショックやバブル崩壊によって失職し、生活に困窮し職を求める人たちの街になったのである。そんな街にはヤクザ屋さんが寄り付き、釜ヶ崎には26ものヤクザ屋さんがあ  
るそう。またそんな街にも警察署がありますがこの警察署は“ボランティア”に來た私たちを助けることはしないのだそう。“こんな街”に來る学生たちには何か良からぬ訳があるのでは。と疑われ

ているようです。そして病院。この辺には散々な診断を下すお医者さんが多く居て、利益主義なんだそう。もうこの街では何を信じていいのかわかりません。働き口がなく暇を持て余している人々は暇つぶしにお酒を飲み、昼寝をし、それでも暇で独り言を話すようになるよう。そのうち暇を苦痛だと思い自ら命を立つ人もいる。この人たちに頼れる家族や信頼できる友人、安定した職の1つでもあれば…。今年で越冬闘争は44回目になりますがこれらは44年間変わらなかった現実です。私はおじさん達との関わりがとても楽しく、来年も来たいと思いました。おじさん達もこの僅かな時間を楽しみに、そのために1年間生きようとか思ってくれないかな～と、そんなことを考えるようになりました。

### ▼三角公園ステージ



### 「感じた違和感」

上田文和

「釜ヶ崎は景気の調整弁である。」この言葉が、釜ヶ崎研修を通して最も印象に残った言葉です。

釜ヶ崎を見下ろすようにそびえたつ、日本で最も高いビル、あべのハルカス。この建設にも釜ヶ崎から多くの労働者が駆り出されたそうです。そして、工事が終わると同時に釜ヶ崎に戻り、路上生活に戻る。労働力がほしいときだけ利用して、いらなくなったらそのままポイ。まさに、景気の調整弁です。

実際に釜ヶ崎を訪れて感じたのは、現在私達が享受している繁栄は、一部の犠牲のもとに成り立っている、かりそめの繁栄であるということでした。そして、その犠牲となっているのが、釜ヶ崎などのドヤ街に暮らす人々です。圧倒的な不正義—しかも自らも加担している—を目の前に、私は何ができるのだろうかという無力感と、どうにかしたい、という焦燥感にかられました。

“ハルカス”には、来場者に晴れ晴れとした気分を味わってほしい、という願いが込められているそうです。展望台にはまだ行けませんでした。13階から見た“晴れ晴れとした”景色を見て、何か違和感を覚えたのは、私だけだったのでしょうか。

▼ハルカス（大阪市、阿倍野区）



### 「支援の持つ2つの顔」

波田地利子

思ったよりも空が狭いなあ、というのが最初の印象だった。路上の左右には、ずらっと辛気臭い、安宿の建物が並んでいる。その建物が空を覆い隠しているのだ。「ドヤ街」なのだから、当然と言えば当然なのだが。

（そういえば、ホームレスと言えば公園だもん

なあ…）

それにしあって、ここが本当にあの「カマガサキ」なのか。まずスラム街に特有のツンと鼻にくる刺激臭がない。ブルーシートも殆ど見当たらない。それでいてやはり普通の町とは違う。三方を高架線路に囲まれて、空気は行き場を失い、淀み、張り詰めている。いつこの静かに充満した緊張感に火がついて、爆発してもおかしくない。拳の汗を握りしめて足早に歩く。

炊き出しの手伝いはとにかく単調だ。ひたすら野菜を刻む。刻む。刻む。刻む。日が沈む頃に、三角公園にて炊き出しの準備を開始。すぐに数百人がずらっと列になる。札幌とは比較にならないその人数には面食らうものの、特に問題なく事は運んでいく。

いささか構えすぎただろうか。

\*

「昔、ここは戦場だったんです。機動隊に火炎瓶投げつけたりね」

白いコートに、頭に巻いた白いタオル。白い胡麻鬚を撫でながら、ミウラさんがニカッと笑った。もう何十年もこの町で支援活動をしているミウラさんを、釜ヶ崎で知らない人はいない。炊き出し準備の合間に、学生を相手に『ゼミ』をしてくれた。

「でも…暴力じゃ何も変わらなかったんです。だから、支援という形をとるようになりました」ミウラさんが踵を返す。ヘンなセクトが釜ヶ崎に手出してこうへんのはミウラさんがおるからやで、と隣の学生が私を小突いて言った。

\*

「いやあ〜、珍しいね君たち！わざわざ北海道から来るなんて！」

若く朗らかな『監督さん』が言った。越冬闘争

の最初の夜、とあるドキュメンタリー制作チームの拠点に泊まらせてもらった。今時珍しく政治臭のする(?)われわれ学生は、甚く歓迎を受けた。ぐらぐら煮え立つキムチ鍋をつつきながら、活動家界限の大人たちが談笑する。

「ワダさんは山谷でばりばりやってたんですよえ。もう行かないんですか？」監督さんが、卓の向こうに訊ねた。ワダさんと呼ばれた初老の男性は、安物の発泡酒をグイッとあおっている。「山谷はなあ、憩いの場って感じじゃねえんだよな。あそこは戦う場所なんだよ」

(また「戦場」か…)

締めうどんを啜る。大人たちの侃々諤々の様をぼーっと眺める。

\*

ミウラさんもワダさんも、学生運動の全盛時代に、バリバリ前線を張ってきた老練な活動家だ。イマドキの学生である私達に、『戦場』だった、当時の寄せ場を知る術はない。

確かに、私たちは今、『越冬闘争』と名付けられた企画に参加してはいる。だがそこに「生きるか死ぬか」という逼迫感はない。炊き出しに並ぶおっちゃん達は、粗野ではあるが基本的に快活だ。学生との交流も楽しい。そう、『憩いの場』と言っても差し支えない。

そう、今は終戦後なのだ。この町の奇妙な静けさは、かつての激闘の末に病める人がリノリウムの床の上で最期を待つ様子を思い起こさせる。

そうこうしているうちに、新しい年を迎えた。とうとう明日釜ヶ崎を発つという最後の夜、私たちは『戦場』の一部を目の当たりにすることになった。

\*

それは間違いなく異様な光景だった。元旦の夜も更け、何の変哲もない地下鉄の駅の階段を、数珠つなぎに降りてくる五十人超の一群。ホームレス、ホームレス、ホームレス…なんて場違いな

のだろう。活動家風情の中年達、その傍をぴたりとマークする黒服マスクの公安職員。そしておずおずと付従う幾人かの学生たち。ホームのベンチに座る4、5人の高校生が、ニヤニヤと携帯で動画を回す。彼らの目の前を、奇妙なパレードが通り過ぎていく。やがてやってきた電車に乗り込んだ。

一団はモダンな装いの梅田駅前を行進する。行き交う人々に好奇と嫌悪の入り混じった視線を感じた。そうして駅のトンネル通路のある地点でピタリと、一群が止まった。そこには特に変わったところもない柱があった。その周りを、数十人がぐるりと取り囲む。花束が柱の下に、そっと捧げられた。ホームレスも、活動家おっちゃんも、学生も、どこか沈んだ面もちで、その一点に視線を落とす。

2012年10月、当時67歳の富松国春さんが、若者数人の暴行によって亡くなった。この場所は、富松さんが最後にいたところだった。

「ここ一応公道なんでえ、邪魔にならないようにしてくださいね！」背後で公安職員が厳めしく叫び、私は思わず振り返って睨みつけた。ヤマモト委員長はそろりとマイクを握り直し、おもむろに口を開いた。「では、公道の邪魔になる形で失礼します…」忍び笑いが起きる。富松さんへの弔いの言葉が、トンネル歩道に響く。

「黙祷！」

この時、黒服マスクの男達が頭を下げていたのかはわからない。何も語らない彼らの双眼に、この光景はどのように映っていたのだろう。

\*

弱者を救う、社会を変える。そんな美辞麗句は、釜ヶ崎にちっとも似つかわしくない。あるのは、強烈な生への執着だ。ナマ温い血の臭みだ。剥き出しの人間の魂のぶつかりあいだ。

戦場か、憩いの場か。『支援』の持つ二つの顔が、こちらを睨視する。

## 自己責任論とどのように向き合うのか

小 川 遼

自己責任論とどのように向き合うのか、貧困問題に取り組む労福会員はよく悩まされる。それは大学の友人からの言葉だったり、テレビだったり、あるいは当事者に向き合う自分自身からだったりする。

反論としては、貧困は構造的な問題であるとか、あるいは人間の主体性というものへの疑問を投げかけていくという方法がよくあるものだろう。構造的な問題というのは、たとえば個人よりも大きな社会のシステムとして一定数の貧困者を生み出してしまうのだとしたら、その貧困者に対してばかり責任を追及するのは不当であるという理屈である。主体性に疑問を投げかけるという方法は、つまりそもそも自己責任論のいう自己というのは何なのか、その範囲はどこまでなのかと問うことで、責任を負うべき主体として人間を見做せなくしてしまう、あるいはそこまで言わなくとも、境遇というものによって人はどうにでもなってしまうのだということを納得してもらい、同情させる方法である。しかし、日常生活では責任というものを前提とせざるをえない以上、これらの反論には限界があるし、勝ち取れるのはせいぜいかわいそうな人々への憐憫の眼差しなのである。

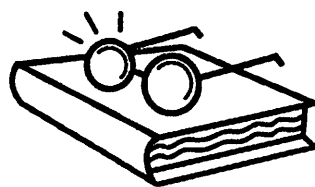
自己責任論に対してこのような答え方しかできないのは僕にとっては長く不満だった。ところで、障害学と呼ばれるちょっとラディカルな視点をもった分野がある。障害者たちもまた自己責任論とよく似通ったものにさらされてきた。彼らは貧困者ほどには他人から直接、あるいは内面から責任を追及されることこそなかったかもしれないが、支援は常にどこしであった。普通の人間にはあるべき何らかの能力が欠如した人間、障害者として、問題は個人という枠に押しとどめられてきたのである。障害学の視点は貧困問題に取り組む者にとってもヒントになるかもしれない。

impairment（障害）というそれは能力の何らかの欠如のことである。障害学ではimpairmentではなくdisabilityという語を用いることにより、問題認識を能力の欠如という個人的なものに押しとどめることをやめた。disabilityとは何らかの不可能という、より本来的な、いわば問題そのものであり、その次元では環境と能力はその不可能に対して等しく責任を負っているのである。たとえばある人が階段を上れずにいるとき、その原因をその人が脚に負っている障害（impairment）に見出すならそれは問題を個人化しているのだ。しかしそれをdisabilityの次元で見ると、そこにはその人が上れないような階段と、階段を上れないその人の脚がただあるのである。

貧困の問題も、個人化される以前に立ち戻って、問題そのものとしてみるという自己責任論との戦い方があっていいのかもしれない。初めに挙げた二つの反論の例が消極的で主体的でなく、支援に対しても受け身な貧困者のイメージを連想させるのに対して、この障害学的な視点から連想するのは、むしろ主体的で生き生きとした、貧困者自身を巻き込んだ運動である。

## 「答えが出ないことをいつまでも考えてる」

大滝雅史（2008 年度事務局長）



労福会の事務局長をやっていた頃、「なんでホームレスの問題にかかわっているのか」と聞かれたりすることが多かった。これには色々な答え方があるのだけれど、僕にとって最もしっくりくるのは、「ホームレスの問題でのが何なのかよくわからなくて、気になるから」というものだった。僕にとってはホームレスという存在（あるいはそれを取り巻く現象）がなんなのかよくわからない。貧困問題の被害者、というのは間違いないのだけれど、それだけではおさまらないものが様々に溢れだして、そいつらがなんなのかわからない。

多くの会員のみなさんが経験のあることだと思うけれど、活動に参加しはじめ、当事者と接すると自分がなんとなく持っていたホームレス等のイメージが覆されたりする。「ああホームレス（問題）って自分が思っていたのとは違って、こういう人たち（こと）なのか」とか思う。でも継続して参加していると、その考えが必ずしも正しくないような気がしてくる。「いや、やっぱりこういう人（こと）なのかも」と。でも考えをあらたにして活動を続けてると、やっぱりまたわからなくなったりする。正確にはわかったりわからなくなったりを繰り返す。現場で関わった当事者の人と、関係が構築できて、何かが共有できたような気がするのだけれど、それがすぐ後にすれ違ったり、実はすれ違ったことがわかったりして、振り出しに戻る。悩む。活動から離脱したりする。でも、またよくわからないまま復帰したりする。

だから、野宿の問題に関わる、というのは果てがないことだなあと思ったりする。有り体に言えば、答えのない問題に挑み続けることになる。色々な知識や経験を動員したりしながら、考える。

「貧困とは」、「労働とは」、「福祉とは」、「野宿・ホームレスとは」、「資本主義とは」、「あるべき支援とは」、「人間にとって（よく）生きるとは」とか。いやいや、そんなことより目の前の当事者と

どう接するか、とか。

それで、こういう作業は楽しいスリリングだったりするのだけれど、しかし思想とか運動の価値観とか深入りしてくと一般社会の常識的な思考（だいたいクソつまらんものが多いけど）からは外れていくことも珍しくない。だって「みんな」はそんなややこしいことはあんまり考えないで生きてるから。ホームレスとか貧困とか、基本ひと事だと思ってるし。で、油断すると「みんな」とずれちゃって、話が合わなくなったりする。大学の中はまだしも、その外部は特に。猛烈なムラ社会と反知性主義砂漠！自民党大勝！やられた。こっちは深入りしすぎて抜け出せない。油断するとそういうことになったりもする（ていうか、なった）。

労福会の活動に関わりつつ、普通に（大）企業とかに就職しちゃう人もいるけど（別にそういうのが悪いとは言わないけど）、僕にはそういう選択はちょっとできなかったもので迷った。「搾取したくないし、搾取されたくない」と思うだけで、選択肢は猛烈に狭まる。くそプチブルのガキである僕には、ガチプロレタリアートになることすらできないまま、とりあえず大学6年と、さらに逡巡のニート期間2年近くを経過して、精神的不調なども経ながら、結局ソーシャルワーク（PSW）に就くために春から専門学校行こうかなとかいうところで落ち着いたりしてる。

こういう仕事をしようと思うのは、「解けない答え」に現場で思考しながら少しでもたどり着くことができれば、と思うから。これはほとんど業のようなもので、やりたいことではあるし面白そうなのだけれど、どうせ儲かるような仕事でもないし、苦勞も多そうである。まったく、こんな機会を作った労福会、実に罪深い。





# タカダコウタロウの 「もうどっか行くしかない！」

目的地に向かう途中に通り過ぎる「無人駅」。乗降客もなく、すっかり寂れてしまった駅。そこにはどのような人々が住み、どのような歴史があったのか。道南の無人駅を覗いてみた。(高田晃太郎)

## 第6回「無人駅と開拓」

こんなところに駅が……。誰もがそう思うような場所に、その駅はある。江差線・神明駅。峠の山深いところにポツンと佇むこの小さな無人駅は、津軽海峡に面する木古内町と、日本海に面する上ノ国町とを結ぶ江差線の中ほどにある。

駅の周辺に、家は5、6軒しかない。遠くまで見渡しても10軒あるかどうかだ。大学3年の春、初めてこの駅を訪れたときは、どうしてこんなところに駅がつくられたのだろうと、不思議に思った。壁にぶら下がった駅ノートを開くと、「何もないけどそれが良い」「聞こえるのは風が通り過ぎる音だけ」、そんなフレーズが散りばめられている。

神明が戦後開拓で開かれた集落であると知ったのは、それからずっと後のことだ。確か新聞記事でそのことを知ったのだと思う。ここにはかつて数百人の人間が暮らしていたそうだ。

戦後開拓とは、戦後、日本政府が行った一連の開拓事業のことを指す。その目的は、食料増産と海外引揚者や復員軍人などの収容というものだった。満州や樺太からの壮絶な引き揚げ体験はよく知られているが、彼らがその後、どこでどのように暮らしたのかは実はあまり知られていない。その一つが戦後開拓だったというわけだ。20万人の人々が全国各地の「未開地」の開拓に入り、神明もそうした「未開地」の一つだった。

ぼくは卒業論文のテーマを「戦後開拓」に決め、夏から秋にかけて神明に計4週間ほど滞在し、開拓民たちの話を一軒一軒訪ねて回った。

ある92歳の女性は、「みじめなもんだ。想像もできない。お風呂に入ることもないし、アカだらけで、あのころシラミだとか、まあひどかった」と語ってくれた。もののない次代。わずかな手荷

物だけ持って開拓地に入ってきた人々は、お互いに助け合って暮らした。一杯のごはんでも分け合って暮らす人間関係がそこにあった。「道庁に何かの陳情に行けばね、神明の共産部落って言われたって。石炭でも、なんでもあるところから貸し借りしてね」。



神明駅が完成したのは1957年。それまで神明の人々は食糧を買いに行くとき、隣の湯ノ岱集落まで5km以上の道のりを線路

に沿って歩いていかなければならなかった。そのうち、列車にはねられて死人がでた。その事故があつてから、神明に駅を設置するよう部落総出で当時の国鉄に何度も陳情に出かけ、やっと駅設置の認可が下りたのだった。しかし、待合室やホームの建設費は部落の負担という条件だった。そのため、地区50戸が伐採木をまきにし、川に流して製材場まで運び建設資金に充てた。「川の水が冷たくてブルブル震えながら」。

ここに駅ができるまでには、そうした経緯があった。それから半世紀以上経った今、神明に暮らすのはたったの二十数人。高度経済成長期の下、開拓民たちのほとんどが離農し、神明を去っていった。いま、高齢化率は70%近くで限界集落だ。神明駅を通過する江差線は2014年5月に廃線になることが決まっている。

開拓民たちにとって、戦後開拓とは何だったのだろうか。もし、次号も書く機会があれば、この続きを書いてみたい。

## 今後の予定

### ■夜回り

とき：毎週土曜日（第四を除く）19:00～21:00

集合場所：札幌エルプラザ 2 階ブース前（北 8 西 3）

札幌駅、大通、狸小路、ススキノ周辺を回ります！

### ■炊き出し

とき：2 月 22 日（土） 18:00～20:00

場所：札幌市民ホール（北 1 西 1）

共催：札幌司法書士会

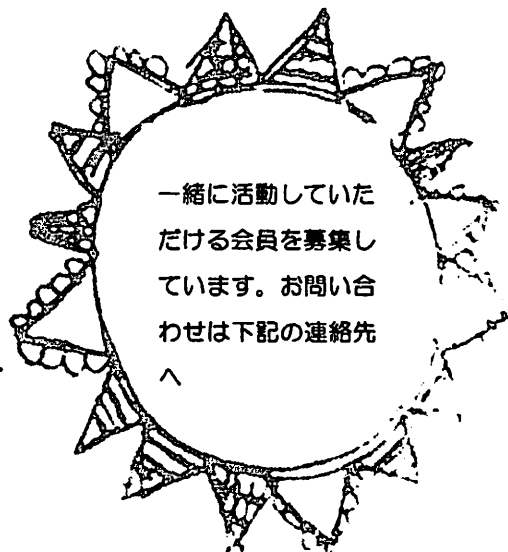
## ご寄付いただいた方々（'13.10～'14.1）

北一条教会さま、楠高志さま、西島知佐さま、小笠原淳さま、  
ハンスハーベストさま

ありがとうございました！！

### 労福会って？

北海道大学教育学部の教員や学生が中心となって 1999 年に発足した任意のホームレス支援団体です。現在は学生に加えて社会人も多く参加し、夜回りや炊き出し、生活保護申請の同伴、人数調査などを行っています。



一緒に活動していただける会員を募集しています。お問い合わせは下記の連絡先へ

会報「ともに生きる」29 号 —2014 年 1 月 31 日発行

発行：北海道の労働と福祉を考える会

発行責任者：山内太郎

編集担当：高田晃太郎

住所 〒001-0008

北海道札幌市北区北 8 条西 3 丁目 28 番エルプラザ 2 階市民活動サポートセンターブース No.11

連絡先 （電話）090-7515-8393 （E-mail）[info@roufuku.org](mailto:info@roufuku.org) （HP）<http://roufuku.org>